

三一新書 565

落書日本史

紀田順一郎著



三一書房

紀 田 順 一 郎

き だ じゆん いち ろう

1935年 横浜市に生まれる
1957年 慶応義塾大学経済学部卒業
現 在 評論家（近世・近代史，書誌）
著 書 『現代人の読書』（三一新書）
『明治の理想』（三一新書）
『日本のギャンブル』（桃源社）
『明治史談』（桃源社）近刊
現住所 横浜市中区千代崎町2の47

落書日本史

定価 290 円

1967年 3月17日 第1版発行

著 者 © 紀 田 順 一 郎
1967年

発 行 者 竹 村 一

印 刷 所 誠和印刷株式会社

製 本 所 本間製本株式会社

発行所 株式会社 三 一 書 房

東京都千代田区神田駿河台2の9
電話東京(291)3131~5番
振替東京84160番

落丁・乱丁本はおとりかえいたします

三一新書 565

落書日本史

らく

しょ

紀田順一郎著

三一書房

落書日本史 目次

3 目 次

I 落書の興隆 天二ロナシ

まえがき……………11

一 笑いの勝利……………14

ムクロあらば今一度 厳肅なる勝利 恥辱の
連鎖 波及する哄笑

二 民の声は神の声……………19

天声人語の系譜 狂歌の淵源 天の使噓 ち
ヤンスの文芸

三 源平落書記……………28

重盛の栄華 早くも落つる伊勢平氏 平家討

つべし 古武士の感傷 武士団の登場

四 鎌倉落書党……………36

女院常に御産あり 二条河原の風雲 愚かな
るにや劣るらん 孤立する傑作

五 側面観太平記……………46

綸言アセの如し キツネの仮病 落書將軍義
満 首かき元年 恐妻伊勢物語 山名の赤入
道

六 国盗り落書……………56

商い宗祇とお伽衆 臨終のうた 勝利の哄笑
嵐の風は音たえて 罵倒の芸術 道は極楽人
は鬼 里見家の法度 狂歌を詠む武将

七 天下一統期の落書……………66

信長をめぐる武将 雑人は記すに及ばず 光

秀の反逆 地下の抵抗 大閤落書 関ヶ原の
ユーマア 埋れた落書の可能性

II 江戸落書選 寸鉄人ヲ殺ス

一 戦国の余風……………78

島原落書党 追腹と謀反と大火 みやこの繁
昌

二 祖法の遵守……………83

獅子身中の虫 赤穂落書考 簡略元年 世相
不安 お蔭まいりの発端 大銭経 落書と権
力 享保改革と落書 喧嘩の色直し

三 幕藩体制の動揺……………104

狂歌という武器 狂歌の心・落書の姿勢 久
留米騒動記 小人の雄田沼意次 テレン国の
サムライ 諸人困究丸 出血はザンザ 川は

流れる

四 ロシアの船をまつるの春……………121

寛政落書談 世界の潮 神風待望の精神 昼
夜のおツトメ 町年寄への頌歌 まいないつ
ぶれ 外記の無念 南部よろこべ 落書の統
計

五 天保落書集……………140

どっと出でたる大塩が 水越と浜の松風 腹
をめしませ おらんだ文字の禍い

III 幕末落書篇 玉ヲ争ウ

一 アメリカ様……………152

上を下へとさわぐ浦 「ペロリ」遠方より来
る ロシアで頭をカキクケコ 聞いてくやし
い御調印

二 へっぽこ大名篇……………161

水戸もない尾張大根 桜田門外血染の雪 な
にに來た！ 井伊了簡はないのかえ

三 浪士暗躍……………173

貼符の恐怖 やけじゃ、どやけじゃ 珍獣
「怖獅子」 国の面よごし 町中一同迷惑門

四 君命軽く身命惜しむ……………181

毛利が種まきや会津がほじくる 徳さんと長
さんの内輪もめ 太鼓うたせて長あそび 渡
るもこわき徳川のすえ 腹のへるのをなんと
西洋 徳川会津ロウソク屋 菊は咲く咲く葵
は枯れる くさいものには紙を張れ 当世よ
くばり武士

五 朝敵名目……………205

奸軍ゼニなし 江戸の水 諷歌の弾圧 三国

IV 落書の終焉 民権自由ノ世ノ中ニ

一 開化調詠版……………218

お直参は乞食さん 文明開化の音がする 埋
草落書は花盛り とりのこされた農民たち

二 明治パンチの抵抗……………229

「団々珍聞」の誕生 黒ダコ退治 ナマズの
一統 諷刺雑誌の弾圧 「団珍」の栄光と悲
惨

三 粹な自由の風が吹く……………243

マグナカルタで遊びたい 今にお金も自由党
民権論者の涙雨

四 近代化と落書の衰亡……………250

9 目 次

史料文献	266
あながき	261
風土の変容 市民的正義と落書 権力における ヘマニユエリスム 機知に対する嫌悪	

まえがき

落書は、われわれの遠い祖先が定型をかたちづくりに、その継承者によって近い過去まで保存されてきた文芸的テクニクで、時事諷刺、権力罵倒の意図を当意即妙へ寸鉄人を刺すゝエスプリに集約した匿名批評の一種です。

それは戦国乱世の時代にあつては、「匹夫下郎」の荒あらしい諧謔であり、言論不自由な幕藩体制下においては庶民の鬱屈の解放手段であり、維新動乱期には世論の喚起と牽引に大きな役割を果す煽動の技術でもあつたのです。さらに明治前半期の言論闘争においては、匿名性はやや薄れますが、定型はそのままひきつがれ、反権力思想の普及に大きな役割を果しています。

ついでに言えば、落書はこの展開過程のなかに分解のモチーフを秘めていたということ、それが近代化の時点において露呈され、形式の喪失によって民衆の笑いの様式そのものを変化させていくという事情も、本書の問題意識から外すわけにはいきません。この視角よりするとき、乱世であり動乱期である現代に、かつての日本人が所有していたような独自の自己表出が発見されぬ

理由は何かという、きわめて重大な疑問が生じてくるはずです。落書は外国にも例のないことではありませんが、わが国の場合のように長い期間にわたって複雑な発展をとげ、独自の効果を発揮しながら、しかも一朝にして滅びてしまったという例はまったく類例のないことだと言えましよう。

落書そのもの、あるいは落書に溝条化キヤナライズされたところの日本人の諷刺精神は今やあとかたもなく失われています。したがって落書を考えなおしてみることが日本人の失われた才能を発掘するにどまらず、近代における諷刺がいに人生と社会への決定的な態度となりえなかつた真の理由を追求することにもなるわけです。これをライト・モチーフとすれば、落書の栄光と没落の歴史は、おのずから描けることでしょう。

以上は落書研究にあたっての問題点を、ほんの二、三指摘したにすぎませんが、序論はこれくらいにして、直ちに落書の中心舞台にとびこんでみることにしたいと思います。

I 落書の興隆

天ニロナシ



寛政十年 十返舎一九自画作

グフトムカシノイクサ
前度往昔軍

一 笑いの勝利

ムクロあら 「一国をかすむるも坂東をみな奪いとるもその罪同じかるべし。何ぞ天下をとらざば今一度 する」

天慶二年（九三九）関東に反乱を起こした平将門は、興世王の戦国論理に使喚しきせんされ、まず関東八州の併呑に飛躍します。在地豪族の分裂、地方武士の割拠という特殊な条件が有利に働いたとはいえ、これが律令制下最初の反乱であっただけに「京官大いに驚き、宮中騒動」したのは当然でした。

しかし「新皇」将門が八省百官の制による一國ユートピアの夢もわずか三カ月、私敵貞盛と賞金めあての藤原秀郷（倭藤太）との連合軍に敗れることにより挫折します。秀郷は一時将門に協力して天下をとろうと考え陣屋を訪れたところ、「周章出でて対面し、酒肴碗飯をかきすえて、種々にもてなす。その体甚だ軽忽なり。あまつさえ将門が食する所の御料、袴の上に落つる時に、みずからこれをはらい拭う。秀郷これを見て、天下をくつがえすべき人にあらず、その行跡民のふるまいなり」と幻滅し、ついに敵にまわった（将門純友東西軍記）というのですが、当時の武将の作法といえはこの程度のもので、秀郷の陣屋訪問はじつはスパイが目的であったと思われる

ます。何人かの影武者を用いていた将門本人の顔を確認しておくためだったのでしよう。

将門の首は翌三年五月、京都で獄門にかけられますが、夜になると眼を開いて笑い「ムクロあらば今一度合戦すべき」と呼ばわったので、時にオコ（尾籠）の者が、

将門ハコメカミヨリゾイラレケリタハラ藤太ガハカリゴトニテ（将門純友東西軍記）

と詠んだところ成仏したという将門伝説、これが中世に現われた狂歌体落書のはじまりとされるものです。

嚴肅な 将門は嘲罵されることにより、はじめて「死」なのです。笑うことがただちに勝利である**勝利** あり、笑われることが直ちに恥辱と敗北を意味した中世的感觉を知らねば、この挿話の内容は理解されないのでしよう。より遠い昔、われわれの祖先にとって笑いということは、嚴肅な境地を指し、「笑い笑われるということが、殺し殺されるというのとほとんど同じ程度に、われわれの生活にとって重要であった」（柳田国男「戯作者の伝統」一九二六）という直観は、諷刺の機能を考える場合の根底となるものです。

ではこの落書にあらわれた諷刺とはなにかというと、将門という一武将の挫折を背景動機をふくめた全体として扱うのではなく、その死因の一面をとりあげているにすぎず、現代人の感覚からすれば諷刺というより揶揄にちかいです。将門は顛顛部こめかみを射られて死んだのですが、こめかみ↓俵↓はかり、という縁語と両用言葉を駆使した狂歌の技巧により生ずるところの滑稽がねらいなのです。